
天使な悪魔

ピヨスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使な悪魔

【Nコード】

N2807F

【作者名】

ピヨスケ

【あらすじ】

転校した学校で博巳が出会ったのは誰もが羨むマドンナ。そんな彼女は天使様？それとも悪魔？今日も学園で繰り広げられるラブコメディ！

第一話

夜空が白々とその風景を変化させ、まだ朝露の残る時。

山間の深くにあるその場所では、時折あがる声と床を踏み鳴らす音だけが響いていた。

建てられて数百年は経過している事が容易に想像出来るその屋敷は、古いながらも先人の知恵と

職人の腕の賜物なのだろう、傾き一つ無くその身を大地に根付かせている。

そして屋敷の敷地内にある離れ　正確には何かの道場だろうか、そこでは二人の男が拳を
交わしていた。

「でええええいつ！」

「そりゃっ」

先に動いたのはまだ幼さの残る少年だった。

男子にしては少し長いその頭髪を揺らし相手に突きを放つ。大きい瞳に長いまつ毛、小柄な体軀は少女と

言われれば見抜けない者が少なからずいる事だろう。

一方、その少年の拳を軽く受け流す人影はと言えば、年の頃は六十位だろうか、

薄くはなっていないが真っ白に染まっている。後ろで束ねた長い髪をなびかせるその姿はある種の威厳さえ

感じさせる。

「てえいつ！」

「くつくつくつ、甘いうつ！」

老人は少年の繰り出した右の正拳突きに対し、内側から外側へと交差させる様に右腕を絡め、そのまま

二の腕を掴み体を右足を後方に動かした上で、己の方向に引き寄せ
る。

「のわっ！」

急激に体ごと前方へ引かれた少年は、すんでの所で右足を出しその体が前に倒れるのを防ごうとする。

「ほーれ終わりじゃ」

その気の抜けた声とは裏腹な鋭い足払いを右足に受け、少年は前のめりに倒れ込む。

ぎりぎりの所で左手を使い、前受け身をとった少年だがその背中に凶悪な重みがのしかかってきた。

「げふっ」

「まだまだじゃのう、博巳^{ひろみ}」

かっかっか、と高笑いしながら博巳の背中に座る老人。

その表情は、先ほどのまでの鋭い眼光の面影は無く、どこにでもいて日曜の朝には河原でゲートボールでも

楽しんでいそうなものだった。

「……いいかげん、どいてくれないかな」

「まあ、そう言うな。可愛い孫とのスキンシップを計ろうという、このじいさんの暖かい家族愛が分からんのか？」

「その孫を座布団代わりにしてるのはどこのどいつですか」

博巳はそう愚痴ると軽く力を入れ起き上がる。

そうして二人は道場の中心に戻りお互いに礼を交わした後、どちらからともなく座る。

「さて……今日から新しい高校だのう。どうじゃ？上手くやっていけそうか？」

「まあ、なんとかやっていけると思うよ。小夜もいるのが心配事の一つだけだ」

「小夜か……あいつも腕は良いがお前に甘過ぎる部分があるしのう……」

「部分っていうか全てが甘いんだけどね」

チチチ、と外から聞こえる雀の泣き声の中、二人は遠い目になる。

「まあ、お前がやっていけそうなら何も文句はない。思う存分学業

に励めよ？なあに、心配事があつたらいつでも

儂に言え。この神代総二郎かみしろ そつじろうの名にかけて、可愛い孫の為なら火の中の水の中、じゃ」

「りょーかい」

「さて……そろそろかのう」

一通り話が終わった二人は道場から母屋の食卓へと向かう。

「あ、おはよう父さん」

「うん、おはよう博巳」

「なんじゃ勝弥かつや、今日は朝から起きとるのか？」

「ええ、仕事が一段落しましたしね。たまには家族と食事をしないと忘れられそうで」

「物書きなんぞになるからじゃ。己の選んだ道じゃろうが」

「ほらほら、勝弥さんもお父さんも。早くいただいちゃいましょう？」

総二郎と勝弥の会話に割って入った女性 総二郎の娘であり博巳の母である神代夢の一言で

総二郎と博巳は食卓に座る。

「おはよう父さん。母さんも」

「はい、おはよう」

「おはよう、博巳。今日から新しい学校なんだから早く食べちゃいなさい。それにその汗も落とさないと」

「はい、いただきますーす」

こうして神代家の朝が始まり、食事を一通り終えた博巳は風呂場へ向かおうとする。登校までは十分すぎる時間がある為、意外とのんびりだ。

その時、母の夢が博巳に声をかける。

「あ、そうそう。お風呂に入る前に小夜を起こしてきてね」

「えー……朝から面倒くさいなあ……」

「文句言わない。早く起こしてくるっ。今日から一緒に登校するんでしょ？」

「僕としては、むしろ置いていきたいんだけど……」

小さく呟きながらも博巳は、妹である小夜の部屋へと向かう。

なんだって転校初日から……などと思いながらドアをノックするが返事が無い。

もう一度ノックしても結果は同じだった為、仕方なく博巳は部屋に入る。

妹とはいえ、年頃の女の子の部屋に入るのは少しばかり躊躇われたが、このまま放っておけば二人とも遅刻なのだからそうも言っていない。

「小夜、朝だぞー起きろー……って、熟睡じゃないか」

声をかけられた小夜だが起きる気配はまったく無い。それどころか布団を頭まで被り直す始末だ。

仕方なく小夜に近付きその体を揺らす博巳。まどろみの中から引き戻された小夜だったが寝ぼけながら目の前の兄を確認した後、その首に両腕を廻してきた。

「お兄ちゃんだあ。お兄ちゃんお兄ちゃん、むふふふう」

「うげっ」

どうやら壊れかけている様子だった。

「やめなさいっ！というか早く起きて！」

「お兄ちゃんが起こしに来てくれたあ。むふふむふふ、朝から小夜はどきどきタイムセールだよっ……」

なんですか、そのやばげなモーニングタイム。

とりあえず、寝ぼけているのか本気なのかは分からない小夜を引き剥がそうとする博巳だったが、小夜のかなりの力に抗えずにいる。

そのまま小夜は自分の方へと博巳を引き寄せ

「ああ……久しぶりのお兄ちゃんの汗の匂い……はふう」

「どこの変態さんだお前は」

自分の首筋辺りに顔を寄せ、くんかくんかと匂いを嗅いでいる妹の

頭をぺしりと叩きながら今度こそ引き剥がす博巳。朝から兄の汗で欲情する妹にかなりの危機感を持った博巳は、そのまま小夜の両目を指で無理矢理こじあける。

「ああっ！こんな強引なお兄ちゃんは初めてかもっ！目がものすごく渴きはじめてるけど小夜は、小夜はあっ！」

「うるさい。とつとと起きろ、この変態シスター」

「あ、おはようっ！お兄ちゃんっ！」

完全に目が覚めたのかやたらと朗らかな笑顔で朝の挨拶をしてくる小夜。

しかし、心なしかその目はとろん、としている事に博巳はげんなりする。

「まったく……少しは兄離れしてくれてるかと思ったけど昨日に引き続き

最悪だな、おい。」

「そんな困った顔のお兄ちゃんも素敵……」

「いいから早く支度しなよ。母さんが怒ってるぞ」

「はあーい」

朝から一悶着あった気がするが、とりあえず無事にお役目を終えた博巳は改めて風呂へと向かう。

もちろん、背中越しに少しばかり病的な妹への一言も忘れずに。

「小夜、お風呂覗いたらもう口聞かないからねー。あと撮影も禁止」

「ぎくっ」

「それじゃ行ってきます」

「はい、いつてらっしゃい。小夜、遅れるわよー」

「分かってるよう……よしと。じゃあ行こっか！お兄ちゃん！」

「……うん」

「今の間はっ？」

本当は一人がいんだけど、と言いたい博巳だがそれを言った瞬間、妹と登校出来るのが如何に素晴らしい事か、

そしてどれだけの男がそうしたいと願っているのかを小一時間は説教されるので口には出せない。

すでに昨日の夜に証明済みだ。そして拒否権は全く無いという事も。そして二人は学校までの道を歩く。

二人が目指すのは神代家がある山の麓にある高等学校。

名前を八代学園やしろがくえんという、公立高校である。

普通科と進学科で構成され、割と規則の緩いこの学校にはこの街のほとんどの

子供が通っている。その高校の二年へと博巳は編入する事になったが、妹の小夜はずっとこの街で過ごしてきた為、半年前に八代に入学していた。

高校までの道案内を小夜に任せてはいるが、問題は小夜の動きだった。

自分の右腕に左腕を絡ませ、さながら恋人の様に寄り添っているのは妹だが、色々な方向でまずい。倫理的にも。

なんていうか、その、当たっている。

こうーむにゅつとした物が。

いつまでも小さい妹なのだと思っていたが、その体は女性的なものに変化しつつある。小振りとはいえ、そこはやはり女性なのだろう、女性とつき合った事の無い博巳にはまるで免疫が無かった。しかも小夜は口さえ開かなければ顔たちの整った女の子である。博巳は妹相手に少しでも邪な気持ちを持った事により自己嫌悪の波に襲われる。

「あれ？お兄ちゃん、どうしたの？」

そんな博巳に追い討ちをかける様に小夜は博巳の顔を覗き込む。

「い、いやっ別にっ」

焦りを隠せない博巳の様子に勘の良い小夜はきらーんと目を光らせる。

「まさか……小夜の体に欲情しちゃった？ここ？ここが気持ち良いのっ？」

「だー！やめろつてば！欲情してなんかいないから！」

慌てる博巳をあざわらうかの様にぐりぐりと小夜は博巳の腕に胸を押し付ける。

あ、やっぱり軟らかいなあ、などと思ってしまった自分にさらに落ち込む博巳。

「違うから！大体、小夜は妹だよ？全然気にならないもんねっ」

説得力ゼロの博巳に対し、今が勝機と悟った小夜が言葉を放つ。

「えー……これでもちよつとは成長したんだよ？母さん程じゃないけど、ブラのカップもワンサイズ上がったし」

「え……そうなの……？」

つい答えてしまった博巳は後悔する。こんな時に反応したら「小夜の胸が気になってたんです」と告白するような

ものだからだ。もちろんその言葉を聞き逃さなかった小夜は邪悪な笑みを浮かべる。

「やった……！遂にお兄ちゃんが小夜を女として……！毎日牛乳飲んで、毎晩バストアップのトレーニングした

努力が遂につ……！」

まるで東大に合格したか、超一流企業の内定を貰ったかのような達成感のある表情を涙ながらに浮かべる小夜。

博巳は小夜の腕を振りほどき駆け足になる。

「ほらっ！早く行かないと遅刻するよ！転校初日から遅刻なんてまズいんだから！」

「待つてようー、もう一度触らせてあげるからあ」

「もう一度も何も、自分から触った事は無いっ！」

第二話

神代博巳。年齢十七歳。

古くから受け継がれている「滅魔」の総本山、神代家の現当主である神代総二郎の一人娘の夢と、その婿養子である

神代勝弥との間に長男として生まれる。妹は神代小夜。

一般的には信じられていない――いわゆる妖怪や幽霊の類いを祓う「滅魔」の力を隔世遺伝により強く受け継ぐも、

本人には至って自覚無し。力自体が潜在的な物として表には出て来ていない事も要因の一つと思われる。

妹の小夜は「滅魔」の力が既に表に出ており、低級なものであれば単独でも祓える様子。

中学は外部の中学に通い、そのまま同系列の高校に進学したが一週間前に総二郎の画策により、八代学園に編入。

本日より新しい学園生活に入る予定。

性格は至って温厚であり、自分から目立っていくタイプではないが周りからの信頼は厚い。

その容姿と穏やかな口調、加えて誰にでも分け隔てなく接する事から、男女問わず人気がある様子。

好きな食べ物は母親が作る生姜焼きと和菓子。

好きな言葉は「なんとかなるさ」

好きな女性のタイプは――

「……好きな女性のタイプは長い髪で年上のお姉さんタイプ、かあ。ビンゴね」

「はい。信用出来る筋からの情報ですので間違いないかと」

八代学園の教室の一つ。

朝の日差しが差し込んでいるとはいえ、やや薄暗いその部屋には一組の男女がいた。

最初に声を発した女が書類に一通り目を通した後、傍らにいる男に向かい笑みを浮かべる。

「藤堂、よく調べたわね。感謝するわ」

藤堂、と呼ばれた男はその顔に薄く微笑みを貼付け、軽く頭を下げる。

「しかし姫様、本当によろしいのですか？」

「なにが？何か文句でもあるの？私が一度決めた事は絶対に変えないのは、藤堂も知ってるでしょう？」

「それはそうですが……」

女はまだ何か言いたげな藤堂をひと睨みで黙らせる。その眼光には無条件で人を従わせられる程の力があつた。

女は部屋の窓に向かい、そこから外の様子を眺める。

「いよいよ会えるのね……この宝龍久遠、あなたの名前を忘れた事は一度も無かつたわ……」

「それじゃあ神代君って、「あの」神代さんとこの息子さんだったんだ」

「ええ、急に戻ってこいって言われて、この学校に入ったんですけどね」

「でも編入試験って大変だったでしょ？うちの学園って結構難しいって言うし」

「なんとかギリギリってとこですかね……普段から勉強しておいて助かりました」

あははー、と笑う女性教師――芝原初美と会話しながら歩く博巳は、新しく入るクラスへと向かっている。

挨拶に向かった職員室で、この初美が担任だと聞かされた時は「この学校おかしくないか？」と思った

博巳だが、それもその筈。

同年代の男子の中ではけっして背の高くない博巳だが、この教師の身長は145センチ程。

最初はどこの中学生が紛れ込んだのでは、と思ったがその疑問はすぐに解決された。

なんというか、その、初美の胸部――つまりバストがかなりの物だったのだ。

博巳の母親もなかなかの物を持っているのだが、その身長と幼い顔立ちからは想像出来ない様な

立派な二つの膨らみに博巳は目をそらし、担任だと信じる事にした。だって男の子だもの。

「到着つと。じゃあ神代君、ちょっと待っててね。呼んだら入ってくる様に」

「はい、分かりました」

まだ騒がしい教室に入って行く担任の背中を見つめ、少し緊張している自分に気づいた博巳は

掌に「人」という字を三回書いて飲み込む。いや、効くのかどうかは分からないが。

すると教室が静かになり初美の声が聞こえてくる。出欠の確認をした後に簡単な連絡事項を伝える初美。

そして少し間を置いた後、ひととき大きな声を発する。

「みなさん！今日は一大イベントがあります。なんと、このクラスに新しい友達が増えましたー！」

小学校か、ここは。

思わず突っ込みたくなった博巳だが、自分が呼ばれる頃合いだと考え何とか踏みとどまる。

「せんせー！そいつって男？女？」

「男の子だよね？初美ちゃん、その子ってかっこいい？」

踏みとどまるー。

「ばっかだなー。こういう時は女って決まってるんだよ。そんで実は俺と知り合いだったりするんだぜ」

「漫画の見過ぎ。きもい。しね」

「結局どっちなんですかー？」

踏みとどまるー。

「ぬっふっふっふ。聞いて驚け、見てわめけ。そして……喜べ！男子ー！」

踏みとどまるー。

「そして……喜べ！女子ー！」

踏みとどまるー。

「それではっ！新しいクラスメイトの神代博巳ちゃんですーっす！」

「ちゃん付けで呼ぶなあっ！！」

踏みとどまらなかった。

ばしーん、とスライド式のドアを開け放ち初美に突っ込む。

その音と声に、ざわついていたクラスが静まり返った所で博巳は自分がどれだけ目立ってしまったかを理解する。

キョトンとした顔の初美の近くまで行き、ペコリと頭を下げた後、勝手かとは思ったが自己紹介をする。

「えと……神代博巳です。宜しく願います……」

直後ー教室中は応援団も真っ青な音量で埋め尽くされた。

「かーわーいーいー！」

「男子の制服だろ？あれ。何で女の子が着てるんだ！？」

「え？どゆこと？どゆこと！？」

「なんだー、そういう事だったのかー」

「ねえねえ、ぎゅっしていい？いいかな？いいかな？」

「はいはい、みなさーん。おさわり禁止ですよー」

なんだ、このクラス。本当に大丈夫か。

というか僕は男だし、初対面でおさわりはされたくありません。そこから博巳が、クラスメイトに質問攻めにあつたのは言うまでもない。

「なあ、本当に男なのか？」

「まず間違いなく。戸籍もしつかり」

「付き合ってる男の子はいるの？」

「いません。というか僕は至ってノーマルです。そういう方向性が好きなら、ご期待には沿えません」

「ちょ、ちよつと、上目遣いで名前呼んでみてくれない？俺、浅野つて言うんだ。あさのくうんつて」

「お金をもらつてもやりません。大体何度も言ってるけど僕は……お！と！こ！」

「こ、この服……き、着てもらえないかなあ？」

「ブルマ出すな」

周りの質問に一つ一つ丁寧に答える博巳だったが、なぜだろう？明らかに間違つた質問が多い。

一時間目がロングホームルームだった事で、初美の提案により博巳への質問タイムが始まつたのだが

いい加減うんざりしていた博巳は大きいため息を吐く。

「あのね……もうちよつとまともな質問をしてもらえると助かるんだけど」

「なにを言うか！みんな至って真面目だぞ！」

先ほど浅野君と呼んでくれ、と言っていた生徒から大真面目な顔で返された。

その時、さすがにこの状況は収集がつかないと思ったのか、一人の女生徒が声をあげた。

「その位にしといたら？神代君もいきなりこんな囲まれたら、きつと皆の事が嫌いになるわよ？」

「そうそう。おさわりは程々にねー」

「先生は黙ってて下さいっ！」

「ふええん。吉川さんに怒られたああつ」

吉川という生徒に叱責され本気で泣く教師、芝原初美29歳。
よしかわ

吉川の言葉を受け、さすがにやりすぎたとも思ったのか、囲んでいた生徒達も少し落ち着きを取り戻した様だ。

「あ、ありがとう……えと、吉川さん？」

吉川智美よ、宜しくね。一応このクラスの学級委員長やってるわ」
よしかわ ともみ

「そうなんだ……尊敬します」

「そう思うのも無理はないわね。さすがにあの状態になったら」

「でも本当に助かりました。有り難うっ」

くすりと軽く笑う吉川に対し、博巳も笑顔を返す。

「え、あ、いや、別に、い、委員長として見過ごせなかっただけで、そ、そういう事だから」

「？」

何やら顔を赤く染めた吉川は先ほどの雰囲気を一変させ、急にしどろもどろになる。

もちろん何故そうなったのかを博巳は理解していない。これが博巳なのだ。

「おい、見たか今の。すげえよ」

「あれは破壊力抜群ね……」

「俺、吉川のおんな顔見た事ねえよ」

「こ、この服……き、着てもらえないかなあ？」

博巳と吉川のやり取りを見ていた生徒はレアな光景に感嘆の言葉を漏らす。

約一名を除いて。あとブルマ出すな。

「こほんっ……それじゃあ、何か分からない事があつたら相談して。」

皆も神代君をいじめない様に」

「うん、有り難う」

二人が言葉を交わした後にチャイムが鳴り、一時間目の終わりを告げる。

なんだかんだあったが、悪い人達ではなさそうだ。皆と仲良くやっていけそうだな、と博巳は思うと

次の授業を受ける準備を始めるのであった。

第三話

「っ……疲れた……」

午前の授業が終わる事を告げるチャイムが鳴った後、だらしなく机の上で伸びている博巳。

智美のおかげで混乱は収まったものの、休み時間になると必ず皆がひっきりなしに質問を浴びせてきたのだ。

中には質問と呼べないものもあり、博巳は何回「ブルマ出すな」と言っただか分からない。

あいつ一步間違つと犯罪者になるんじゃないか。

などと考えていた博巳の後ろの席に座っていた浅野から声かけられる。

「おっつかれい。大変だったな」

「その大変の半分は浅野君の煽りのせいだった気もするんだけどね」

「あっはっはっ、小さい事は気にするな」

この浅野という男、休み時間の度に博巳に対し「もじもじしてみてくれ」だとか「下の名前を可愛らしく

呼んでくれ」などというリクエストをしていたのだった。周りも博巳のリアクションを見てみたいが為に同調するのでたちが悪い。

こいつも犯罪予備軍じゃないだろうかと思ってしまうのも無理は無かった。

「んで？博巳ちゃんは弁当？学食？」

「ちゃん付けはやめてって言ってるでしょうが」

「良いじゃんかよー。んで？弁当だったら一緒に食おうぜい」

「はあ……もう空しくなってきた……じゃあ一緒にー」

「博巳せんぱーい！あなたの愛するラブリー小夜ちゃんが、恋のスーパーエクスプレスに乗って

「只今参上っ！とうっ！」
「げ」

博巳が浅野に言葉を言い終わるかどうかという所で、教室の前の扉が豪快に開け放たれた。

もちろんクラスの皆は突然の出来事に口をぽかん、としている。

「すみませーん！このクラスに今日編入してきた神代博巳先輩いますかあ？彼と一緒にお弁当

食べようかなあ、と思ってダッシュで来たんですけどお。えへへっ」
何が楽しいのか知らないが、弁当箱らしき物を片手に頬に手をあて、ぐねぐねしている小夜は

意味不明な言葉を連発していた。

後日、音速を超えていたかもしれないとクラスメイトに証言される素早さで小夜に向かう博巳。

「とてつもなく意味が分からないよ、小夜ちゃん？まず、小夜と僕は間違いなく血の繋がった兄妹であって、

確かに学年は上だけど「先輩」ってのはちょっと違うよね？あと「彼」って呼び方はとても変だと思うんだ。

それにラブリーって何かな？恋のスーパーエクスプレスって何かなっ？何かなあっ！？」

「あだだだだだだだだ。せんぱ……お兄ちゃんのその容赦ない攻撃に、小夜の鼓動は高ぶって仕方無いの。

というか、こめかみに指が食い込んでいやあ指じゃない爪が爪があ」

ぎりぎり、と音が聞こえてきそうなアイアンクローを受けているにも関わらず、頬が赤く染まっているのは

痛みのせいなのか、それとも他の感情なのか。博巳は後者では無い事を祈る。

「それで？何しに来たんだよ」

「あー気持ちよか……痛かった。何しにって、もちろんお兄ちゃんにご飯を食べようと思って。」

そんな訳でしつづれいしまふぎよっ」

「とりあえず落ち着こうよ」

「ひ……人に足を引っかけておいて何も悪びれないお兄ちゃんが小夜は大好きです……」

教室に侵入しようとした小夜に足を引っかける、というより足払いに近い攻撃を加え転倒させる博巳。

「はあ……とりあえず皆さん、お騒がせしました。あと、こいつは妹の小夜ですが、変な関係とかは無いのでご心配なく」

その博巳の発言によりこちらを奇異の目で見ていたクラスメイトは元通りに昼食を再開する。

一部から「なんだー」だの「つまんなーい」だの聞こえてきたのは無視しよう、と博巳は決意する。

「まあまあ、良いじゃんよ。一緒にご飯食べようぜい」

ちなみにこの発言は浅野である。いつの間にか博巳達の横にきていた彼は弁当箱をちらつかせながら

のほほん、と博巳の返答を待っている様だ。

「しょうがない……今日は我慢しよう……ほら、小夜。皆で食べよう」

「そうそう。皆で食べれば美味しいよん。しかも一年の中でも美人と評判の子と昼食がとれるなら

こんなに嬉しい事は無いわな」

そう言つて小夜を立たせようと手を差し出す浅野。

「何ですかこの手は。せつかくお兄ちゃんに起こしてもらおうと思つたのに小夜の計画が台無しです」

「は……はい……すいませんでした……」

どんな計画だ、と浅野は突っ込みたかったが尋常ではない小夜の気迫に気圧される。

「小夜。そんな事言うなら二度と一緒にご飯は食べないぞ」

「いやあん。お・に・い・さ・ま。小夜のちよつとした冗談です！

あつ、すみませんでした、そちらの……ええと」

「浅野光一^{あさの こういち}。宜しくね。小夜ちゃん」

「はい、浅野さん。手を貸してくださいさってありがとうございます……」

「……………くそがあ……………」

最後の部分は決して二人に聞こえない様に小声で呟く小夜。やはりこの娘は心のどこかに闇を飼ってるのかもしれない。

「えと……………そんじゃあ二人とも。今日は俺が昼食タイムにおすすめのとっておきな場所を教えてあげよう！
じゃあ行こうぜい！」

「えっと、意味が分からないんですけど？私はお兄ちゃんと二人つきりで昼食を食べ、その後は膝枕なんかをしてあげて「柔らかなあ、小夜の膝枕は」「うふふつ、くすぐつたいよお兄ちゃん。あつ、そんな所に手を」

みたいな展開を期待してるんです。あなたは呼びじゃありません」
「小夜」

「うっわあ、楽しみです！浅野さん、そのベストプレイスとやらはどこにあるんですかあつ？」

またも黒いんだかピンクなんだか分からない発言をした小夜を二文字で嗜める博巳。

「あ……………ああ……………とりあえず付いてきてくれよ」

「ふう……………じゃあ行こうか、浅野君。というかこれからご飯なのに凄い胃が痛くなってきた……………」

そして教室を出て行く三人。もちろん他のクラスメイトは遠慮という名前の回避行動を取っていたが。

「えーっと……………僕の予想と脳内が正常なら、ここは屋上に出る扉の

前で更に浅野君はピッキングと呼ばれる行為を行っている気がするんだけど」

「おかたいなあ博巳ちゃん。大丈夫だってば。いつもこうやってるんだから……と」

浅野の発言はカシャン、という音を立て鍵が開くのとほぼ同時だった。

階段を登らされ、そろそろ上の階は無いはずなのでは、と感じていた博巳の問いかけにも浅野は動じず、小夜も不満な顔ながら若干わくわくした表情を見せている。

「そうだよお兄ちゃん。高校生は屋上でご飯を食べる事の一つや二つは経験しないとつたいないんだから」

「小夜。その発言は絶対正しくない」

またも意味不明な持論に辟易する博巳を置いて、浅野と小夜は屋上の扉を開ける。

普段から鍵がかかっているのを見た所、他に人はいない事は容易に想像出来る――箒だった。

「あら？浅野……君だったかしら？」

誰もいない筈の屋上で一人昼食をとっている生徒がいた。

「あ……あれ？宝龍先輩じゃないっすか？どうして――」

「それはあなた達も同じじゃない？」

「まあ、確かにそうっすけど……でもまさか宝龍先輩みたいな人が一人で、しかも屋上で食べてると思わなくて」

「別に友達がいらない訳じゃないのよ。ただ、たまに一人になりたい時もあるわ」

「そうっすか……つと、ああこの人は三年の宝龍久遠先輩だ。どうだ、すげえ美人だろ」

「やめなさいってば。確かに見られない顔じゃないとは思っけど、世の中には私より綺麗な人はいくらでもいるわ」

苦笑しながら謙遜する仕草も絵になっているような美人だった。

決して染料などでは無い天然の茶色の髪を少し伸ばし、謙遜の言葉を放った口元は少し厚めの唇にうっすらと

紅を挿した様な桃色だった。

目元はやや吊り気味だったが、大きめの瞳に長く整ったまつげを備えている。

一言で言えば美人。ただ、有無を言わせない美しさがある様に博巳は感じた。

都内の中学そして高校に通っていた博巳だったので、それなりに綺麗な女子を見た事はあったが、宝龍久遠という

女生徒からは全く別次元のオーラの様なものが出ていた。

そして浅野の後ろにいた博巳達に視線を向け、一瞬目を見開いた――と感じたのは博巳だけだったろうか。

驚いた様な、それでいてどこか懐かしむ様な視線を向けられた博巳だったが、軽く袖を引つ張られる。

もちろん引つ張ったのは横に立つ小夜だ。その横顔には先ほどまでのふざけた表情ではなく、眉間に軽く皺を寄せ、

何か嫌な物を見てしまった、という表情を貼付けていた。

「行こう、お兄ちゃん」

小夜の口から出たその言葉の真意が分からず博巳は訝しげな視線を小夜に送る。それは振り向いた浅野も

同じだった様だ。

「どうしたの？どこか具合でも悪い？」

「いいから行こうってば。ここは――あの人は何か嫌だ」

「ちよっ……小夜、失礼な事言うなってば」

「そ、そうだよ小夜ちゃん。滅多な事言うもんじゃないよ？」

博巳の問いかけに答えた小夜の言葉は博巳も、そして浅野も予想しなかった答え。

その言葉に二人は慌てて小夜に声をかけるが、小夜は黙ったまま博巳の袖を引く力を強めるだけだ。

その様子を見つめていた宝龍は、食べ終わった弁当箱を片付け立ち上がると博巳達の方へと歩を進め、

「お邪魔になる様だったら悪いから行くわ。もう食べ終わったし」と言い残し博巳達の背後にある扉から出ようとする。

「あ、あのっ！すみません。妹が失礼な事を……えっと、今日二年に編入してきた神代博巳です。

ほんとすみませんでした」

慌てた博巳が挨拶すると宝龍は博巳を見つめ、軽く笑った後で博巳の方に手をかけ耳元で囁く。

「いいのよーーーくん」

「えっ？」

美人の顔が近かった事で更に動揺したのか、耳元で囁かれた言葉の後半が聞き取れない博巳。

ぼうつとした博巳にもう一度微笑み、扉から出て行く宝龍。

その後ろ姿を博巳はただ見送るしかなかった。

第四話

「いや、しかし相変わらず美人だったな」

「さっきの宝龍って人？」

「博巳ちゃんもそう思うだろう？ あんだけ綺麗で頭もいいんだぜ。あと親父さんがどっかのお偉いさんだって」

「うわあ……人生勝ったも同然だね、それ」

浅野の話を聞いて素直に羨ましがる博巳。

三人は只今、昼食の真っ最中である。母の夢が作ってくれた弁当をつつきながら浅野の話に耳を傾ける。

「でも浅野君って宝龍先輩に詳しいんだね？」

「まあな。というか、あの人の事はこの学園の人間ならほとんど知ってるぜ」

「へえ、それにしては個人的に名前も覚えられてたみたいだけど？」

「そりやお前、俺が去年告白したからじゃねえか？」

さらりと発言したが、今この場に宝龍がいない事でその告白は失敗したか今は付き合っていないかが分かる。

「しかも大衆の面前でルパンダイブしながら告白したからな。多分、印象が強かったんだろ」

「へ……へえ……。浅野君の度胸は素直にすごいと思うよ……」

自分だったらそんな馬鹿な真似は出来ない。大体ルパンダイブしながらって何だそれ。

「それで？話を聞いている限りじゃ当然告白は失敗したんでしょ？」

「おうよ。目標まであと60センチって所でネリヨ・チャギ（かかと落とし）が炸裂してな。でもな……黒のレースを

見ただけで俺は本望だった」

「ねえ、やっぱり浅野君って馬鹿なんだよね？」

告白が目的だったのかパンツが目的だったのか。ともかくこの男、そういうものへの執着心はすごいのかも

知れない。

そんな馬鹿な話を博巳と浅野がしている間、ずっと無言だった小夜が口を開いた。

「お兄ちゃん。さつきからずっと宝龍って人の話ばかりだよね？
どういう事？」

「どういふ事、というのがそもそも意味不明だが小夜のその気迫に博巳は背中に悪寒を一筋走らせる。

「どういふ事も何も……どうしたの？変だよ？」

「変じゃない。お兄ちゃんはああいう人がタイプなんだよね。年上でお姉さんで長い髪の人」

「おろっ？何だよ、博巳ちゃん。宝龍さんに惚れちゃったかあ？」

「惚れっ……！何言ってるんだよ。小夜も浅野君も変な事言わないの」

「でもなあ、やめとけやめとけ。宝龍先輩ってガードが固いからな
「不沈艦」とか「八代のデ・ダナン」とか

呼ばれてるんだぜ」

「どこの傭兵部隊の船ですか？それ。」

「だからやめといた方が無難だぜ？確かに博巳ちゃんは顔も悪くない……というか女の子みたいな顔だからな。」

「俺には小夜ちゃんの方が恋人っぽく見えるよ」

「浅野さんもつと言ってくださいさあもつとどんと言ってください
いこれ以上無いくらい畳み掛ける様に」

「さ……小夜……目が怖い……。あと浅野君も小夜の事を変に焚き
付けないで」

「しつつかし、小夜ちゃんってとんでもないブラコンだな」

目の色を変え援護を要請する小夜を見て、やや呆れた様に浅野がため息をつく。

「そうなのです。私は身も心もお兄ちゃんに捧げたのです。という
か実妹では無いから染色体的にも
オールオツケーです」

「え？そうなの？」

「浅野君、本気にしないで。小夜とは正真正銘、血の繋がってるから」

「ああん、お兄ちゃんのその蔑む様な視線は小夜にとって何よりも代え難い宝物です……」

「こりや重傷だな」

「でしょ？」

こうして編入初日の博巳の昼休みは中毒者気味な目をした小夜と、かかと落としをくらいながらもパンツを目に焼き付ける浅野に囲まれ、過ぎていくのだった。

「なんというか……今日一日で一年分の体力を使った気がするよ」

「そりやあれだけ囲まれたりしたらね。でも良かったじゃん、人気者になれてさ」

「あれは人気とは違う気が。なんかペット的な扱いを受けてた様な……」

「ペットになったお兄ちゃんかあ……ぞくぞくするう」

「やめなつてば」

博巳はスイッチの入りかけた小夜の額に軽く手刀を落とし黙らせた。放課後にも一波乱あるかと思っていたがそんな事は無く二人は現在、家までの帰り道を二人で歩いている。

山の中腹にある自宅までの道は多少整備されているとはいえ、街灯も少なく夕日の明かりだけが頼りである。

お被い稼業の寺——博巳達の実家だが、その寺が中腹にある事も手伝い、昔からこの辺りにはあまり人が

近寄る事はなかった。

博巳や小夜の友達も進んで遊びに来ようとは思わなかった様で、二

人はいつも相手の家や麓の

遊び場に集合していたものだ。

「でも私のクラスにも噂はまわってきてたよ？二年にすごい可愛い女の子が転校して来たらしいー、ってね」

「ぜ……全然嬉しくない……」

「まあまあ。きもーいとか、がっかりとか言われるよりも良いじゃない。そんな可愛いお兄ちゃんを持つて

小夜は鼻高々なのです」

「そりやどうも。兄としての威厳は少しも無い様に感じるけどね」

「でもお兄ちゃんを狙う様な奴がいたら、その時は小夜が思いつく限りの苦痛を与えてやるからっ。安心してね！」

小夜さん、それは犯罪行為です。どちらかという。しかも、何でそう明るい顔で言うかな。

猪突猛進で一方通行な小夜の言葉に博巳は頭の中で突っ込みを入れる。

「とりあえず初日の感想なぞはどうですか？お兄ちゃん」

「んー……まあ、色々あったけど何とかうまくやっていけそうかなと。クラスの皆もいい人ばかりだったしね」

茶化す様に聞いてきた小夜に対し、今日一日の事を思い出しながら答える。

確かに行き過ぎた人間が多かったのは事実だが、決して嫌な気持ちを持たれた訳ではないと博巳は思う。

「そっかー。残念きわまりないけど、ここは妹として喜んでおくべきだよ」

「そゆ事」

そんな他愛も無い話が終わろうとする頃、二人は住み慣れた家に着く。

そして玄関に手をかけた時、中から何やら騒がしい声が聞こえて来た。

「あれ？お客さんかな？」

「みたいだねー」

博巳と小夜は中に入り、帰宅を家族に知らせると奥から母親の夢が迎える。

「ああ、おかえりなさい。今お父さんにお客さんが来てるのよ。というか私たちのお客さんでもあるんだけどね。」

「ちょうど良かったわ、二人もご挨拶なさい」

「そう言われ、博巳と小夜も夢と一緒に奥の客間へと向かう。」

「蓮君、二人とも帰って来たわよ。博巳、小夜、こちらは宗谷蓮君。お父さんの元・教え子で私と

勝弥さんの友達でもあるの」

「どうも初めまして。神代博巳です」

「こんにちわー。神代小夜です」

簡単な挨拶を済ませた博巳は蓮、と呼ばれた男に目を向ける。

年の頃は三十前半くらいだろうか、髪は色素を全て抜いた様に白く腰まで伸びていた。

やや細めの目の中にある瞳は金色に輝いており、日本人の名前である事が不思議なくらいの人物だった。

「やあ、博巳ちゃんに小夜ちゃん。随分大きくなったねえ。お久しぶり、かな？」

「へ？」

目の前の人物に会った記憶が無い博巳は思わず間の抜けた声を出してしまう。

自分の記憶を掘り返してみてもこの蓮という男の事は博巳の頭の中には無いのだ。

「ええと……覚えてないかな？でも無理ないかな。博巳ちゃん達がまだ本当に小さくい時だったからねえ」

「すみません……って事は小夜も？」

「うん、覚えてない」

博巳の問いかけに小夜は首を振る。というかこの妹は兄以外の男に興味なさげだ。

「そつかあ、ちょびつと期待してたけど忘れられてたのはやっぱりシヨックかな」

「だって蓮君が前にここに來たのって……確か博巳が三歳くらいの時なのよ？そりゃ忘れるって」

「夢ちゃんも相変わらずだねえ。そういえば勝弥君は？」

「今ね、お仕事が佳境みたいで。誰も部屋に入るなつて言われてるのよ」

「それじゃあ、何とか夢は叶えた訳だ。昔から文章を書く時は切羽詰まった顔してたもんねえ」

昔を懐かしむ様に蓮と夢は会話を続ける。

博巳と小夜の二人はまだ制服だった事を思い出し、それぞれの部屋へと着替えに向かう。

もちろん変態街道を進み始めている妹に釘をさした上で。

そして二人が客間に戻ってくる頃には既に蓮が玄関に向かい帰ろうとしている様子だった。

「それじゃあ、総二郎さんに夢ちゃん。博巳ちゃんに小夜ちゃんもまた遊びに来るからねえ」

「全く……久しぶりにこの家に來たんじゃ。一晩くらい泊まっていっても罰は当たらんじやろくに」

「それがそういう訳にもいかないですよ。それに……これからの準備がありますしねえ」

「そうじゃったな。僕も協力は惜しまんからな、夢も勝弥もそのつもりじゃ」

「ありがとうございます。それじゃあ、皆さんまた会いましょうねえ」

そう言い残し帰っていく蓮を家族で見送った後、博巳は蓮の事を聞こうと総二郎や夢に問いかける。

「ねえ。あの人って……人間？」

「え！？」

博巳の突然の質問に驚いたのは妹の小夜だった。今までこの総本山

の弟子で、夢や勝弥の友人と聞かされれば

普通は人間以外の何者でも無いと思うのだから無理は無い。

「ほう、博巳は分かったか」

「いや、何となくなんだけど……こう……上手く説明出来ないや」

「それでも、完全に上辺を作っていたあやつの中身を感じる事を出
来るとはな。さすが儂の孫、と言った所かの」

「なによ、私は全然気づかなかったのにー」

「かっかっかつ、小夜も腕は上げたが肝心な所はまだまだじゃのう」
大きな声で笑う総二郎の言葉に小夜はますますむくれ始める。

「でもさあ、何で「向こう」の存在がおじいちゃんの弟子なんてや
つてた訳？ 実際、共存してるって言ってもわざわざ

滅魔の修行なんて好き好んでやらないでしょ？ だって、下手したら
自分が危ないつてのに」

小夜の質問に目を細める総二郎。

「まあ、「向こう」の奴らの中にも変わり者がいる、という事じゃ
よ。それにあやつは力の使い方を間違える様な奴でも

無ければ立場的にも無理は出来んのじゃ」

「立場？」

「それについてはその内にな。夢、儂は腹が減って仕方無いんじゃ。
早く飯にしてくれ」

「はいはい、博巳と小夜もちょっと手伝ってくれる？」

まだ話に納得していない様だったが夢に付いて行く小夜と博巳の後
ろ姿を見つめ、総二郎は呟く。

「……これで更に面白くなりそうじゃのう……」

もちろん博巳と小夜にこの呟きが聞こえる事は無い、と知りながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2807f/>

天使な悪魔

2010年10月28日07時27分発行